みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

北東インドの歴史：アホム王国時代の歴史

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 月原, 敏博 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003706

アホム王国時代の歴史

アホム王国時代には，インド世界と東南アジア大陸部世界の双方から，アッサム地方へ向けて政治的，文化的な影響が波及した。インドの影響を代表するものは，いくつかのヒンドゥー教の宗派，イスラム軍，イギリス勢力などであり，東南アジア大陸部の影響を代表するものは，タイ系民族（シャン族）に他ならぬアホム王国や，ビルマ軍などである。

東南アジアの大陸部では，河谷の低平地での水田稲作を主たる経済基盤にする集団と，山地部にて焼畑や狩猟，採集を主たる経済基盤にする集団が居住空間を分けており，双方の間には，政治，経済上の共棲や対立関係の見られることが広く知られている（例えば，[リーチ　1987]）。アッサム地方の現状において，山地諸州が，次々に生まれたことに引き継がれているように平原の民と山地の民の共棲，対立は，アホム王国時代においても外交，戦役史上の重要なテーマの一つであった。

また，次に広大なアッサム谷平原に展開した戦役史に目を転じてみれば，これを織りなしたのは，いくつかの主要な宗教勢力，民族勢力であったといえる。アホム族侵入以前からアッサム平原にはヒンドゥー教の影響があったといわれるが，アホム族は彼らの民族宗教をアッサムに持ち込んだ。これは，デオダハーイ (Deodhai)，モハーン (Mohan) などの祭司階級に引き継がれることになる。しかし，アホム王国は，それに加えて，サンカルデブにより，まずクーチ王国から広められたヴァイシュナヴァ (Vaishnava) 派，さらに肉とアルコールの摂取を禁じはしないサクタ派（シャクティ信仰，性力派）のヒンドゥー教を採用することになった。このアホム王国に対して，ベンガルからは回教軍が何度も攻め入った。また，ヴァイシュナヴァ派から生まれたモアマリア(Moamaria)派は，上アッサムの下層階級に広まって，ブラーマンを最上位とする階層性を否定し，強力な反乱を起こしてアホム王国を脅かした。

13世紀，アホム族は，上ビルマより上アッサムに侵入し，ブラマプトラ平原上部に支配権を確立した。以後勢力範囲は拡大に向かうが，アホム王国の中心地域は，一貫してブラマプトラ平原上部に存在することになる。当時，平原の下方にはクーチ族，カチャリ族といった勢力があり，周囲を囲む山地には，さまざまな山地諸部族がいた。

アホム王国初期には，山地諸部族のほか，ビルマ側のフコン (Hukawng) 谷のシャン族勢力との争いが多い。時代が下るに連れて，それまでのアッサム中央部の最大勢力であったカチャリ王国，下アッサム平原に中心を持つカーマタ王国，クーチ王国，

回教軍などの諸勢力と争うことになる。この地域の有力な勢力としては，これらの他に，マニプール盆地にはマニプール王国，ジャインティア山地からシレットにかけては，ジャインティア王国があった。

アホム族は，15世紀頃からしだいにヒンドゥー化する。回教軍の侵入は15世紀に始まるが，17世紀に至ると，ベンガルの回教権力から強大な軍事遠征が行われ，アッサム史は新たな展開を見せる。結果的にはイスラム勢力の陸路東征を阻むことになるとはいえ，首都ガルガオン (Garhgaon 現在のシブサガル周辺) を一時的に占領されたこともある。また，モアマリア派の反乱など，止むことのない宗教勢力の反乱に手を焼き，ビルマ軍の蹂躙によって大打撃を被ることになる。そしてビルマ軍を追い出すためには，イギリスの力を必要とすることになったのである。

しかし，アッサムにおけるアホム王国のもつ意義は大きい。600年間にわたって上アッサムを統治し，現在まで引き継がれる社会構造を築いたのである。タイ系部族であったアホム族は，上アッサムに侵入した当時，既に文字を持っており，年代記ブランジ (buranji) に象徴されるように，すぐれた歴史感覚を持った民であった。多くのブランジは，アッサム中世史の重要な史料となっている。上記の諸王国の状況などは，ブランジ文献によって初めて明確に知られるのである。ここでは，ゲイト，バス (Basu) にしたがって，アホム王国時代の歴史を概観する [ゲイト 1944; Basu 1970]。

アホム (Ahom) 王国の成立と拡大

アホム族はタイ (Thai) と自称するタイ系の民族である。なかでも，グレート・タイ，あるいはシャン (Shan) 族などと呼ばれるものに属し，カムティ (Khamti) 族などとともに，北ビルマを中心に住み着いているマウ (Mau)・シャンあるいは，マオ (Mao)・シャンといわれるシャン族のグループに入れられている。アホム族の持つ王統の降臨神話は，このグループに共通のものである。

その神話というのは，天に住んでいた二人の兄弟であるクーンライ (Khunlai)，クーンルン (Khunlung) が鎖を伝って地上に降り，その王統の子孫がムンリムンラム (Mungrimungram)，ムンクムンジャオ (Mungkhumungjao)，ムンカン (Mungkang) などの国をつくり，あるいは治めていったというものである。アホム王国建国者と伝えられるスカーパー (Sukapha) は，シュウェリ川畔のマウルン (Maulung) の王統から出たといわれる。

スカーパーは，1215年，シャン族の王の持つ偶像であるソムデオ (Somdeo) を携え，9,000人の男女，象2頭，馬300頭をつれて，マウルンを出発したといわれている。そ

して13年間かけてフコン谷からパトカイ (Patkai) 山脈を越え，上アッサムに入ったといわれる。最終的に都をチャライデオ (Charaideo) に建設し，ナガ (Naga)，モラーン (Moran)，ボラーヒ (Borahi) などの諸族を抑え，バル・ゴハイン (Bar Gohain)，ブルハ・ゴハイン (Burha Gohain) の2大臣をおき，アホム族と諸族との通婚を奨励したという。

スカーパー (王位 1228–68) の子ステウパー (Steupha 王位 1268–81) の時代には，同じシャン族であるムンカンのナラ族に対して討伐隊を送るほか，カチャリ族からデクー (Dikhu) 川以東の地を奪っている。

スカーンパー (Sukhangpha 王位 1293–1332) の時代には，カーマタ (Kamata) 王国と戦い，ブラマプトラ河谷の実質上の支配を獲得する一方，ムンカンの王が納税を要求したのに対し，それを拒絶している。

ストゥーパー (Sutupha 王位 1369–76) の時代には，チュティヤ族との間で戦いがあり，王は暗殺されている。テャオカムティ (Tyaokhamti 王位 1380–89) はチュティヤ族を討伐したが，後宮間の問題から重臣たちに暗殺される。

テャオカムティの第2の妃の子であるスダーンパハー (Sudangpha 王位 1397–1407) が捜し出されて王位に就くが，彼はバラモンに育てられた人物で，このころからアホム王国のヒンドゥー化が始まることになる。バラモンが王の顧問の地位を得て，ヒンドゥー教の祭儀や慣習が行われ始めるのである。スダーンパハーはバラモン王とも呼ばれる。スダーンパハーは，ドーラー (Dhola) に都を建設したが，後にチャルグヤ (Charguya) に都を定めた。ティパム (Tipam) の首長たちの叛乱に端を発して，ムンカンの王が侵入軍を送ったが，1401年，双方のバル・ゴハインによって和平が締結され，パトカイ山脈が両国の境界として決定された。またスダーンパハー王は，カームジャーン (Khamjang) 族，アイトン (Aiton) 族などの服属を強化した。

スセンパー (Susenpha 王位 1439–88) の時代には，タングス・ナガ (Tangsu Naga) と戦闘がなされた。次のスヘンパー (Suhenpha 王位 1488–93) の頃にも戦闘は再開され，バル・ゴハインが殺害されるなどするが，最終的には撃破する。スヘンパーは，タイルンバン (Tairungban) という氏族の者によって暗殺されるが，スヘンパーの子であるスピンパー (Supimpa 王位 1493–97) が犯人を処刑する。またスピンパーの妻の一人は，王の怒りをかってあるナガ族の一首長のもとに送られるが，そこでスピンパーの子を生むことになる。

スピンパーの後を嗣いだスフンムン (Suhungmung 王位 1497–1539) 以降は，王はヒンドゥー名も持っており，アホム王国でのバラモン勢力の拡大がうかがわれる。

スフンムンはバカタ (Bakata) に都を建設する。氏族分けなどの社会制度も整えられ，また，サク紀元も用いられるようになった。さきのナガ首長の家に生まれたスピンパー王の子は，バルパトラ・ゴハイン (Barpatra Gohain) なる新官職を与えられ，バル・ゴハイン，ブルハ・ゴハインと並ぶ地位となった。

この時代には数多くの戦闘が行われ，徐々にアホム王国領土が拡大した。1504年には，アイトニア・ナガ(Aitonia Naga)の反乱を撃破した。1512年，ハーブン(Habung)地方を併合，1535，36年は，カームジャーン，ターブルン (Tablung)，ナムサン・ナガ (Namsang Naga) などの部族と戦闘し，服属させている。カームジャーン・ナガは100頭の野牛を貢納したという。

1513年，侵入したテュティヤ族を撃破し，ムンクラン (Mungkhrang)，ナームダーン (Namdang) 地方を獲得する。これらの前線では長期にわたって戦闘が続くが，アホム軍は徐々に進撃し，チュティヤ王は殺され，その領土はアホム王国の役人であるサディヤ・コワ・ゴハイン (Sadiya Khowa Gohain) によって統治されることとなる。1527年には再びチュティヤ族の反乱を鎮圧する。

1526年，スフンムンはカチャリ族に対して進撃し，撃破する。1531年には再び戦役は再開され，アホム軍はカチャリ王国の首都ディマプール (Dimapur) にまで進撃した。その後再びカチャリ族との戦闘が行われたが，アホム軍は大勝し，再びディマプールへ進撃するが，カチャリ王は逃亡しており，アホム王国の領土はカラン川以北のカチャリ領土一帯まで広がった。

1526年，最初の回教徒の侵入が起こる。また，1531年には回教徒の第二次侵入が起こり，それに続いて，第三次侵入が起こる。水上戦闘を含む戦いは一進一退を繰り返すが，アホム軍はバーラリ (Bharali) 川の戦闘で回教軍に打ち勝ち，その将ツルバック (Turbak) を討伐し，カラトヤ (Karatoya) 川まで進撃し，地方君主フサイン・カーン (Husain Khan) は捕らえられて殺された。この頃からアホム軍は火器を使用し始めたといわれる。1537年，クーチ (Koch) 王が来貢しており，同年マニプール王には使者が派遣されている。

父を殺して王位についたスクレンムン (Suklenmung 王位　1539–52) は，ガルガオン (Garhgaon) に遷都し，また，貨幣を最初に作った王として知られている。1546年より侵入したクーチ王国と戦って失地を回復しているが，当時のクーチ王ナル・ナラヤン (Nar Narayan) は下アッサムで最も強大な王であった。

1603年，スカームパー (Sukhampha 王位　1552–1603) の時代には，ナル・ナラヤンの弟チラライ (Chilarai) が兵を率いてアホム王国の首都ガルガオンまで侵入す

る。ブルハ・ゴハインのアイケークが代表となって和平締結がなされ，アホム王国はクーチ王国の優位を認めてブラマプトラ北岸の大部分を割譲し，人質，金銀，象，布の賠償品を提出する。しかし，チラライが去ると，スカームパーは，クーチ軍駐屯地であるナーラヤンプール (Narayangpur) に入城し，アホム軍の敗因を調べてアイケークをブルハ・ゴハインから免じ，軍を整備してクーチ軍に備え，労することなく人質も取り返し，失地を回復した。

1563年と1570年には，クーチ王国の将テプが再び侵入したのに対してこれを撃退した。1577年，クーチ王国内の内紛から1,400人の軍勢がアホム側に亡命した。1585年にはクーチ王女がスカームパーの嫁に迎えられた。

1555年，アイトニア，パープク (Papuk)，カムテン (Khamteng) といったナガ勢力に対して討伐隊を送り，1569年には，プーセンタ (Phusenta) というナガを討伐，1573年にはアイトニア・ナガ (Aitonia Naga) を討伐した。1577年，ムンカンのナラ (Nara) 王はカームジャーンに侵入しているが，これも撃退している。

1563年，ナームラップ (Namrup)，ティパム (Tipam) に侵入したチュティヤ族に対しては，軍をサディヤ (Sadiya) に進駐させ，1,000人を殺害し，3,000人を捕虜とした。チュティヤ族は，1572年に再度来襲するがこれも討伐した。

回教戦争時代

スカームパーの後を嗣いだスセンパー (Susengpha 王位　1603–41) の時代からは，さらに長くきびしい戦争が続く。カチャリ王はアホム王国内に攻め込み，一進一退の度重なる戦闘の後，和平が結ばれた。一方，1615年，ムガール帝国ベンガル知事のシェク・クアーシムはアッサム討伐の軍を送ったが，これをバーラリ川にて撃退した。後退した回教軍に対して追撃をかけたが，ハージョ (Hajo) より敗戦を続け，アホム軍は後退した。バル・バルア (Bar Barua)，バル・プーカン (Bar Phukan) の官職を新設したのち，アホム軍は再び回教軍を迎え撃った。敗北した回教軍側からの講和申し入れによっていったん戦闘は終結するが，アホム軍がハージョまで再び奪還したところでダッカから回教軍の援軍が到着し，再び大きな戦闘となった。ハージョを奪還したアホム軍は回教軍を追走し，クーチ王の勢力下にあった多くの酋長たちの服属を得る。しかし，またもやダッカからの新鋭軍が下アッサムへと到着した。回教軍侵攻に備えていたアホム軍もバーレバイタにて敗北を喫し，スリガート (Srighat) へと退却したが，そこでの水上戦闘も不利で，さらにコリアバール (Koliabar) まで後退した。回教軍はガウハティを本拠にかため，上アッサム侵入を企てた。アホム軍はそれ

を阻止したが，もはや追撃の力もなく，アホム側が和平を申し入れ，ブラマプトラ北岸のバル・ナディ (Bar Nadi) 川，南岸のアスラル・アリが両国の国境とされた。

ナリヤー・ラジャ (Naria Raja 王位　1644–48) の時代には，ダフラ族やカムテン・ナガ族が討伐されたが，王はブルハ・ゴハインたちによって廃立され，毒殺された。ジャヤドヴァジ・シン (Jayadhvaj Singh 王位　1648–63) 時代には，ラクマ・ナガ (Lakma Naga) 族やミリ (Miri) 族が討伐されたほか，アホム軍が下アッサムに派遣された。ガウハティまで進撃し，クーチ軍を撃破して彼らをサンコシュ (Sankosh) 川まで駆逐して，実質上アホム王国はアッサム全域の覇者となった。しかし，1662年，ベンガル総督ミル・ジュムラ (Mir Jumlah) のアッサム遠征が始まり，アホム軍はジョギゴーパ (Jogighopa) での敗北などによって次々と退却を続けた。回教軍は，ガウハティ，シムラガル，コリアバールと前進を続け，ついに首都ガルガオンにせまり，それを占領した。この時，アホム王はチャライデオ (Charaideo) へと退却した。雨期になり前線の補給が困難になると，回教軍は徐々に退却を始めた。回教軍本隊がしりぞくとアホム軍はガルガオンを攻撃し，奪還した。結局，アホム軍はミル・ジュムラと講和条約を結ぶが，彼の病死によって回教軍はベンガルに帰還した。

チャクラドヴァジ・シン (Chakradhvaj Singh 王位　1663–69) の時代には，バーンチャン・ナガ族やミリ族を討伐するほか，アホム軍は再びガウハティの回教軍を攻め，数か月かけてこれを陥落させ，バル・プーカンの居城とするが，ガウハティ陥落の報を聞いたアウランゼーブ帝は，ラーム・シンを指揮者とする大軍を派遣した。戦闘はテズプール (Tezpur) などで行なわれ，一進一退が続いた。戦役はスンヤトパー (Sunyatpha 王位　1669–1673) の時代へと引き継がれるが，一連の戦闘によってアホム軍はカムルップ (Kamrup) の西境まで回教軍を退却させ，ガウハティには強固な保塁が築かれた。またこの頃ダフラ族も討伐されている。

転換期のアホム王国

スンヤトパーが毒殺されて以降，ララー・ラジャ (Lara Raja 王位　1679–81) の死に到るまでおよそ10年ほどのあいだに，7人もの新しい王が王位につくが，いずれも殺害されており，アホム王国は混乱期を迎える。これは，重臣たちであるバル・ゴハイン，ブルハ・ゴハイン，バル・バルア，バル・プーカンなどが手段を選ばず競いあったことによる。陰謀，反逆，暗殺，内乱が続き，王国内の秩序は混乱を極めた。ガウハティも再び回教徒の手に落ち，山地諸部族も平原にしばしば侵入し始める。しかし，都をパルコラへと定めたガダーダハル・シン (Gadadhar Singh 王位　1681–96)

は，内乱を抑え，ガウハティの回教軍を一掃することに成功した。これが最後の回教徒戦争となり，国境はマナス (Manas) 川に定められた。またこの時代には，ヴァイシュナヴァ派の勢力が強まったことによって，サクタ派勢力とのあいだで対立が高まり，王は僧侶を殺すなどしてヴァイシュナヴァ派を迫害し，サクタ派を擁護した。また，ガダーダハル・シンは，回教徒の土地測量方式に学び，アッサム領土内の測量を開始した。面積の単位はプラ (pura) であり，1プラは，約0.5ヘクタールに相当する。

ルドラ・シン (Rudra Singh 王位　1696–1714) は，ヴァイシュナヴァ派の迫害を停止し，カチャリ王国，ジャインティア王国に攻め入り，それらを併合したといえるほどの服属を得たほか，そのほか多くの山地諸部族の帰属を得たことで知られる。またベンガルから文化，技術を取り入れ，諸方との交易を盛んにしたという。

シブ・シン (Sib Singh 王位　1714–44) は，ヒンドゥー教を庇護し，アホム族の間にも酒や肉を絶つことが広まった。

ラージェスヴァル・シン (Rajesvar Singh 王位　1751–69) の時代には，ダフラ族に対して侵入を禁止した条約を結び，ミキール族を討伐した。また，ビルマ人に侵攻を受けたマニプール王国から，ビルマ人を駆逐した。

ラクシュミ・シン (Lakshmi Singh 王位　1769–80) の時代に至ると，ヒンドゥー教の一派であるモアマリア派の強力な反乱が発生した。

アホム王国の衰退

モアマリア派の反乱は，ガウリナータ・シン (Gaurinath Singh 王位　1780–95) の時代に入っても止むことなく，さらにダラン (Darrang) の属王の子であったクリシュナ・ナラヤンの反乱も起こり，上アッサムでの反乱に対処できなくなった王は，ガウハティのバル・プーカンやマニプール，カチャリ，ジャインティアの諸王の援護を求めるほどに追いつめられ，首都ガルガオンは焼き払われた。モアマリア派の勢力は拡大し，また，この混乱によって多くの小王が地方に現われた。ついにガウリナータ・シンは，イギリスに助けを請い，これが1792年のウェルシュ大尉の遠征として実現する。ウェルシュは，ガウリナータ・シン王が部下をきびしく罰するのをおさえ，クリシュナ・ナラヤンを屈服させ，ガウハティから上アッサムへと進み，モアマリア軍を撃ち破りつつランプールまで進軍した。

しかし，遠征隊の撤退にともなってガウリナータ・シン王はランプールを断念してジョルハット (Jorhat) を首都としたため，東インド会社は上アッサムに駐屯軍をお

くこととなった。

こののち，カマレスヴァル・シン (Kamalesvar Singh 王位　1795–1810) からプランダール・シン (Purandar Singh) までアホム王国は存続するが，ダフラ族，モアマリア派，シンポー族，カムティ族，カチャリ族などは各地で次々と反乱を起こし，ビルマ軍の侵入，ビルマ戦争へと至った。

アホム王国の政治体制

王は国家元首であるが，王の即位，外敵との対戦と講和に関しては，3人のゴハイン (Gohain) に対して諮問し，同意を得なければならなかった。ゴハインは，一般行政，外交に関して王を補佐したのである。またゴハインは自分の領地内では多くの独立した統治権をもっていた。

王位の継承は，世襲によってなされた。王族でないものが王位に就くことはできなかった。即位の大典は，初代の王スカーパーが都に定めたチャライデオにおいて行われた。それには降臨神話の時代から伝わる王位のしるしであるソムデオと呼ばれる像や，ヘンダーン (Hengdan) と呼ばれる剣が用いられた。チャライデオはアホム族の祖先礼拝の中心地である。

先に述べたように，ゴハインには，アホム王国成立時から設置されていたバル・ゴハインとブルハ・ゴハインがあり，スフンムンの時代に新設されたバルパトラ・ゴハインを合わせると3人であった。

ゴハインに次ぐ官職としては，大守であるバル・バルアとバル・プーカンがあった。これらは，プラタープ・シン(スセンパー)王の時代に，王の政務委任のために新設されたもので，世襲によって引き継がれる官職ではなく，12の特定の家系から選ばれたものが充てられた。バル・バルアは，サディヤからコリアバールにいたる地域の統治権をもち，11,000人のパイク (paik 成人男子) と軍隊を支配下においていた。バル・プーカンは，もとカラン川からブラマプトラ川の間を統治していたが，アホム王国領土の西方拡大につれて，ガウハティを根拠地としてコリアバールからゴアルパラを統治するに至った。

地方大守には，サディヤ・コワ・ゴハイン (Sadiya Khowa Gohain)，モランギ・コワ・ゴハイン(Morangi Khowa Gohain)，ソラル・コワ・ゴハイン(Solal Khowa Gohain)，カジャリ・ムクヒア・ゴハイン (Kajali Mukhia Gohain)，サリンのラジャ (Raja of Saring)，ティパムのラジャ (Raja of Tipam) などがあった。これらの他に，服属することによって地方大守として認められた地方君主たちがあった。

以上の地方大守たちは，地方の租税を徴収して王へ貢納する義務を有するほか，地方における裁判権をもっていた。

その他の官吏については，軍事上の事項を含まぬ官職は，アホム族以外の原住民の上層階級のものを任命しても差し支えなかった。この中で最高位の官職はプーカン (Phukan) である。プーカンによって構成されるものに，バル・バルア会議，バル・プーカン会議があり，それぞれ6人のプーカンによって構成されていた。これらの会議はバル・バルア，バル・プーカンの諮問機関である。この他に，様々な専門職をもったプーカンがあった。プーカンに次ぐ官職としては，バルアがあって，これには，やはり様々な専門職をもった20数人のバルアがあった。

そのほかの官職には，バル・バルアに従属して3,000人のパイクを統率していたラージコワ (Rajkhowa)，王の代理として外国および山地部族と折衝する官職であるカタキ (Kataki) などがあった。

15才から50才の成人男子はパイクと呼ばれ，国家に対して兵役や賦役の義務をもっていた。4パイク（後には3パイク）は1ゴット (got) に組織されていた。ゴットの中のメンバーが交代しつつ，常に一人は土木工事などの政府の仕事に勤務していた。その間勤務中の者の家族や耕地の面倒は，他のメンバーが見ていた。この土木作業によって，アホム王国時代には多数の道路，池，土手が作られたのである。

パイクはさらにケル (khel) に組織されていた。ケルはそれを指揮する官吏の等級にしたがって区別されていた。官吏の名前とそれの指揮するパイクの人数を列挙すると以下のようになる。ボラ (Bora 20人)，サイキア (Saikia 100人)，ハザリカ (Hazarika 1,000人)，ラージコワ (Rajkhowa 3,000人)，プーカン (Phukan 6,000人) である。ケルは高位の貴族の間に分配されていたし，官吏には給与の代わりにパイクがあてがわれていた。パイクは主人の意志でやり取りすることができたのである。パイクは，ケルの役人の統制からは逃れることはできなかった。

これらの奉仕に対して，各パイクは地代免除の水田2プラ (pura 約1ヘクタール) を与えられていたほか，屋敷地と菜園に要する土地が与えられていたが，人頭税として1ルピーを政府に支払っていた。氾濫原での移動耕作者は鋤税を払い，綿を栽培した山地部族は鍬税を払っていた。また水田はときどき分配し直されたので，世襲的なものではなかった。

戦争捕虜や山地諸部族から買得した奴隷は主人のものであり，耕作などに使われたが，彼らは国家に対しては何の義務ももってはいなかった。奴隷は公然と売買された。

（月原敏博）